野沢尚
Nozawa Hisashi

水曜日の情事

a Wednesday love affair

Shinchosha 新潮社

野沢尚
Nozawa Hisashi

水曜日の情事

a Wednesday love affair

Shinchosha 新潮社

野沢 尚

1960年、愛知県名古屋市生れ。日本大学芸術学部卒。映画「その男、凶暴につき」、テレビドラマ「青い鳥」「眠れる森」「氷の世界」など、手がけた脚本は多数。作家としては『破線のマリス』で江戸川乱歩賞を受賞し、脚光を浴びる。『恋愛時代』で島清恋愛文学賞、『深紅』で吉川英治文学新人賞をそれぞれ受賞している。

水曜日の情事

著者／野沢 尚

*

発行／2001年12月15日

発行者／佐藤隆信

発行所／株式会社新潮社

郵便番号 162-8711／東京都新宿区矢来町 71

電話・編集部 03(3266)5411・読者係 03(3266)5111

*

印刷所／株式会社三秀舎

製本所／株式会社植木製本所

*

© Hisashi Nozawa 2001, Printed in Japan

日本音楽著作権協会（出）許諾第 0114717-101

ISBN4-10-451201-X C0093

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

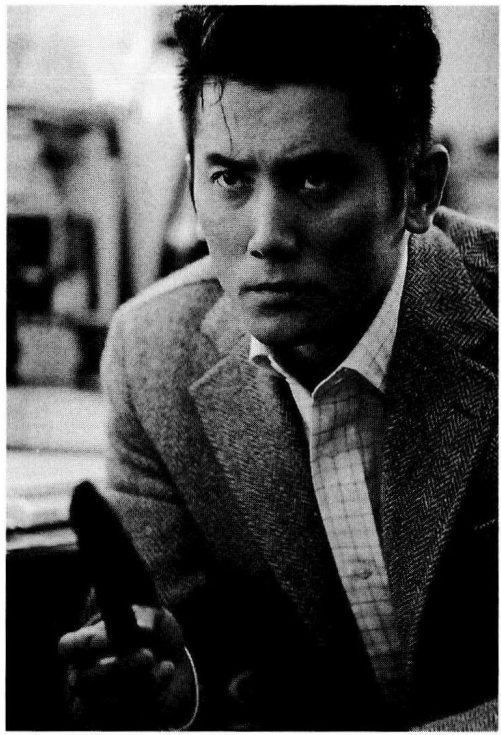
水曜日の情事＊目次

第一回　生涯、妻を愛する男　11
第二回　肉体の小悪魔　49
第三回　恐るべき妻の正体　81
第四回　シチューの中の結婚指輪　111
第五回　結婚記念日の裏切り　143
第六回　愛人、壊れる　173

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第七回　離婚届、記載洩れなし　201
第八回　別れた妻とのキス　231
第九回　逆転不倫　261
第十回　ぬくもりを知った場所　291
最終回　結婚式の悲恋　319
あとがき　351

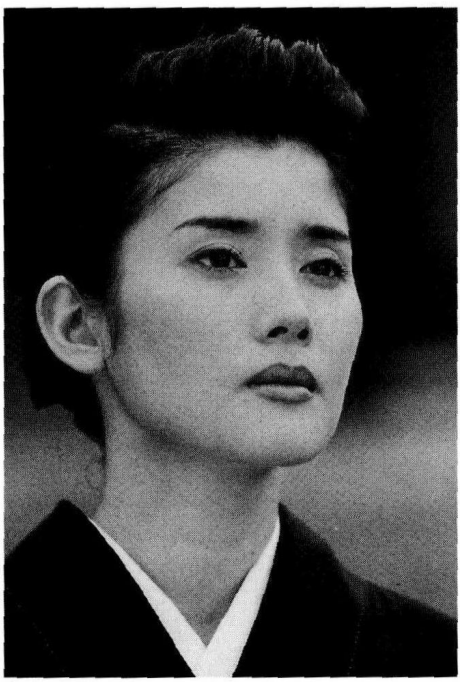
CAST



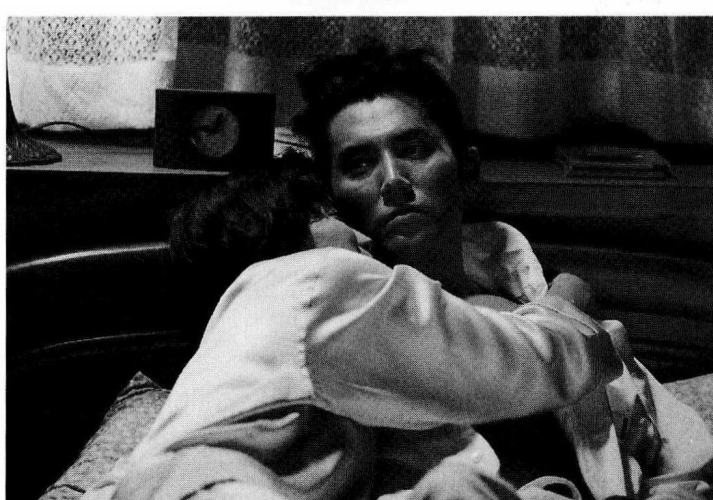
佐倉詠一郎（本木雅弘）

佐倉あい（天海祐希）

前園耕作（原田泰造）



天地 操（石田ひかり）



a Wednesday love affair

装幀　新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

水曜日の情事

第一回　生涯、妻を愛する男

詠一郎と耕作が文壇バーの指定席で向かい合っている

白い漆喰の壁と太陽のアクセサリー。「ソル」という名前らしくスペイン風の内装だが、常連客の有名作家の本が並んでいて、ここは銀座並木通り沿いで名の通った文壇バーである。上等な服を着ているわけではないが白いシャツの着こなしがお洒落、と思わせる佐倉詠一郎と、ユニクロの消費文明にどっぷり浸かっている前園耕作。

詠一郎「(それまでの会話からいきなり話題を変えたように)……先生はさ、この世で一番恐ろしいことって何だと思う?」

耕作「この世で一番……?」

詠一郎「身の毛もよだつ恐怖」

耕作「そりゃやっぱりサイバーダイン社のターミネーター三度(みたび)現わる、でしょう(デデンデ、デデンとテーマ曲のイントロを口ずさんで)マシンガンで吹っ飛ばしても、グレネードランチャーでばらばらにしても、自分で部品をかき集めて襲いかかってくる。ああ思い出すだけでも鳥肌立っちゃう。『アスタラビスタ・ベイビー』(と、パート2のシュワルツェネッガーの真似をして)……でもなあ、やっぱパート1のように悪役やってくんないと、思いきりパート3では」

詠一郎「はっ」

耕作「あ、鼻で笑った」

詠一郎「先生はね、いつまでもそんなこと言ってっから、マニアしか喜ばないドンパチばっかのアクション小説しか書けないの。愛に飢えた世の男たち女たちの心を熱く揺り動かす恋愛小説、いつになったら書けるの? 一生書けないの?」

作家相手にかなりキツイことを言うが、言わ

れる耕作の方も慣れている様子。
この店のママである小暮志麻子が、耕作お気に入りの若いホステス（浜崎由香子）を連れてくる。

志麻子「先生、読んだわよ、今月の小説現代、よかったわあ、血湧き肉躍る冒険小説ってあのことよねえ！」

由香子「一気に読んで一気に元気になっちゃった」

耕作「（理解者がいてくれて）これからはママとユカちゃんのために書いちゃう」

詠一郎「（志麻子に）あっち行って、今、大事な話してんだから。男と女の愛を遊びにしか思っていない銀座の女には、聞いてほしくない話、してんだから」

志麻子「あっ失礼ねえ（と、笑いながら離れる）」

詠一郎は水割りで喉を潤すと、もったいぶった感じで身を乗り出して、

詠一郎「ここに一人の男がいる」

耕作「……（聞く）」

詠一郎「生涯妻を愛すると誓った男に（と、自分の結婚指輪を掲げて見せ）よもやの人生の転機が訪れる」

耕作「本当に誓ったんスか佐倉さん。そこが疑わしいんだよな、そもそも」

詠一郎「男はあろうことか……（軽さは消えて）女房の親友と恋に落ちてしまった。あんなに女房のことを愛してたのに。よりにもよって、相手は女房の親友だ」

耕作「やっぱり自分のことじゃないですか」

詠一郎「時々家に遊びに来るその愛人と、男は女房の目を盗んでキスをする……自分の家でそういうこと、よくできるよな」

耕作「（言われてしまい、何も言えなくなる）……」

詠一郎「男は妻への愛を痛みのように感じながら、愛人の唇に引き寄せられていく……これってただのスケベかな（と自嘲）」

耕作「熱病ですよ、きっと（と少し慰めてや

る)」
詠一郎「関係が深まったある日、遂にそれが起こってしまったんだ」
耕作「え……何が起こったんスか」
詠一郎「愛人がおもむろに、男の前に放り投げた」
耕作「放り投げたって、何を」
詠一郎「それは六十度の角度でホテルの床に突き刺さった」
耕作「突き刺さったって、何が」
詠一郎「包丁」
耕作「……」
詠一郎「新聞紙にくるんで持ってきた文化包丁。そして愛人は微笑んで言う。わたしをこれ以上抱きたかったら、それで奥さんを殺してきて。できるでしょ、わたしのことを愛してるなら」
耕作「……」
詠一郎「どう思う、これ」
耕作「(ぶるった)怖い……」
詠一郎「そのために新しく買った包丁じゃないんだよ。朝まで家の台所で沢庵とか奈良漬けとかトントン刻んでた包丁なんだよ」
耕作「怖すぎますよ。で、それ、受け取ったんですか?」
詠一郎「どう思う?(と、はぐらかし)とにかく先生、これが世にも恐ろしい男と女の物語ってやつだよ」
耕作「佐倉さん、どうしたんですか、その包丁!」
詠一郎「(それには答えず)一カ月前に、時間を戻せたらなあ……」
と、神妙な顔つきで水割りを飲む詠一郎。
詠一郎N(ナレーション)『その一カ月前までの俺は、「世にも恐ろしい男と女の物語」とは無縁の、主婦にとっては理想の亭主のような、明るく爽やかな愛妻家だったんだ……』

タイトル・クレジット

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com